

# ICT(情報コミュニケーション技術)教育と異文化理解

久保田眞弓

はじめに

二〇〇六年六月三日(土)、四日(日)の両日、異文化間教育学会第27回大会が大阪府の関西大学高槻キャンパスで開催され、二日目の午前にシンポジウム「ICT(情報コミュニケーション技術)教育と異文化理解」が開かれた。シンポジストにお願したのは、日本福祉大学の影戸誠氏、中京大学の宮田義郎氏、関西大学の久保田賢一氏である。三人のシンポジストに加え、デイスカッサントとして兵庫県立大学の松田陽子氏にお願した。影戸誠氏は、かつて九年間、高等学校の教師でいら

つしやり、その経験を活かし、一九九九年よりWorld Youth Meeting(以下、WYM)を企画、運営、実施し、継続している。WYMとは、台湾、韓国、中国、カンボジア、スリランカなどアジアの高校生と連携し、同じテーマで調べ学習をし、八月初旬に名古屋に集まって共

教育と

同で発表会を行うプロジェクトのことである。発表に向けての準備、発表会、ホームステイ、発表会後のまとめなどを一年かけICTを駆使して行っている。そこで、ICTを活用した異文化理解の具体例としてWYMについて教育工学の視点から紹介していただくことにした。

宮田義郎氏のご専門は、認知科学で、毎年開催されるWYMを研究対象のひとつとし、認知科学の視点からその意義や学習効果などについてデータを収集し考察されている。そこで、その研究の成果についてご報告していただくとともに学びとの関連からご意見を伺うことにした。

久保田賢一氏のご専門は、教育工学である。そこで、現在行っている大学での教育活動を中心にICTを活用した異文化理解の実践、たとえば、Meet the Globeプロジェクト、国際学校間交流、海外フィールドワークなどについてご報告していただくとともに、構成主義の観点

[キーワード]  
ICT  
コミュニケーション  
文化  
国際交流  
つながり

からICTを活用した新しい学びのあり方について、整理し、提言していただくことにした。

松田陽子氏には、三名のシンポジストからの報告を受け、異文化理解や異文化コミュニケーションの専門的な立場からコメントしていただき、ICTを利用することによって、どのような異文化理解が促進できるのかを引き出していただくことにした。

ところで、例年は、三名のシンポジストから問題提起をしていただき、それを受けてディスカッサントがコメントし、フロアからの質問は、質問カードに記入していただくことでシンポジストと質疑応答していた。しかし、今回は、事前打ち合わせのなかで、各シンポジスト間のやり取りを多くし、フロアからのご質問も直接口頭でお願いし、対面コミュニケーションを重視した方法で、シンポジウムの二時間半をダイナミックに使うということで意見が一致した。

当日は、二〇〇名以上の方々にご参加いただき、三名のシンポジストには、パワーポイントで適宜、実践の様子などの写真やテキストを提示していただきながら、お互いのやり取りを交えて発表していただいた。それを受けてディスカッサントの松田氏にコメントをいただいた。さらに、後半では、日系ブラジル人の松原ルマ・ユリ・アズキさんが作成したビデオ作品（８分）を鑑賞し、ご

本人から作成の意図を伺うとともに松田氏から本シンポジウムとの関連を解説して頂いた。また、手話通訳の方々とともに二日間の学会に参加してくださった世田谷福祉専門学校の砂田武志氏にろう文化におけるICT活用についてコメントを頂いた。そしてフロアからは、多くの質問の手が挙がったが、時間の関係で、五名から八つのご質問を頂き、それについてシンポジストがお答えするという形で進行了た。

本稿では、まず、主題設定の趣旨を述べ、次に、三名のシンポジストによるご報告と、ディスカッサントによるコメントを整理し、最後に松原ルマさんの作品とコメント、砂田氏のコメントをまとめ、シンポジウムから明らかになった点を述べる。紙幅の都合上、残念ながら時系列ですべてを報告できないことをお許し願いたい。

## 一 主題設定の趣旨

二〇〇一年より「高度情報通信ネットワーク社会形成基本法」通称「IT基本法」が施行され、学校のIT（情報通信技術）環境が急速に整備された。そして二〇〇三年より小学校では総合的学習の時間、中学校では技術・家庭科の時間、高等学校では、普通教科「情報」が必須となり、情報化への対応がカリキュラムの中に盛り込まれ実施されることになった。一方、初等中等教育にお

ける国際理解教育の推進は、二〇〇二年より導入された「総合的な学習」で取り組まれるべき課題として例示され、各学校の創意工夫のうえで進められている。しかし、これまでITをどのように駆使すれば、どのような異文化理解につながるのかは、あまり議論されてこなかった。

たしかに、インターネットを利用して日本と国外の学校を結んだ国際交流学習には、さまざまな実践がみられる。交流を通して英語や日本語といった語学の力をつけるもの、互いの文化を紹介するもの、環境問題などテーマを決め、調べ学習し、議論したりするもの、などである。それら個々の実践をも踏まえたうえで、さらに技術が進んで手軽になったICTを考えると、多文化社会の形成を前提にした異文化間教育との関連で取り上げ、再考する必要があると思われる。

ところで、シンポジウムの題目をITではなく、あえてICT (Information and Communication Technology)とした。ITという用語のほうが一般的に知られていると思われるが、イギリスなどの学校教育ではすでにICTの用語を使用している。インターネットの普及によりネットワークサービスが拡大し、双方向のコミュニケーションやインターネットアクションの重要性が問われるようになった。そこで、ITという情報通信技術を強調した用語ではなく、「コミュニケーション」や「ネ

ットワーク」を重視したICTの役割を検討する必要があると思われる。

ICTには、コンピュータを基礎とする道具（ツール）や技術のすべてが含まれる。たとえば、交流を促進するツールとして利用する場合、同期型では、テレビ会議、チャットなどが考えられ、非同期型では、電子メール、電子掲示板、データベース、ウェブページ、などがある。また、CD-ROMやインターネットを情報源として活用することも可能である。デジタル技術の普及でビデオカメラ、デジタルカメラ、携帯電話などとあわせても利用でき、ビデオレターなど多様なコミュニケーションの形態が考えられる。さらにブログの普及で老若男女を問わず容易に情報発信できるようになった。

そこで、シンポジウムでは、これらの技術やツールを駆使することで、どのような異文化理解が可能となるのかを改めて考えることにした。ICTを利用することで相互理解は深まるのか、限界はあるのか、あらたに生み出される異文化の学びはあるのか、などを検討する。

## 二 シンポジストからの報告

### (一) 影戸誠氏の報告

#### 「インターネット活用交流デザイン A—Z(学校の壁、同僚の壁)」

##### ー ワールドユースミーティング

影戸氏は、一九九五年より国際交流の場面でインターネットを活用しており、インターネットならではの可能な国際交流のあり方を探求している。一九九五年当初は、ネパール、韓国などの高校生と日本の高校生が電子メールで交流し、その後、日本で対面の交流会を開催するという形式で国際交流が展開された(KAGETO 1997)。

これは、スクールネットを利用して企画されたものである。この交流から国際交流を支える要素や、ウェブページをはじめとするインターネット機能の活用方法、教師、生徒の役割が明らかになった。そして、これらの実践をふまえ「ワールドユースミーティング」(World Youth Meeting: 以下、WYM)が企画され、一九九九年に第一回目のWYMが名古屋国際センターで開催されることになった。WYMの開催に当たっては、中学校や高校、大学の教員約二〇名が連携して実行委員会を組織し、文部科学省はじめ地域の教育委員会、日本教育工学振興会などの後援を得て実施している。これまでの参加国は、

ドイツ、イギリス、ジンバブエ、スリランカ、パプアニューギニア、オーストラリア、アメリカ、ネパール、韓国、台湾、中国、カンボジア、タイなどで世界中に及んでいる。当日は、中学生や高校生が中心となり海外の生徒と一緒に準備したものを英語でパワーポイントを使って発表する。

そのような大規模なWYMの開催にあたっては、約半年をサイクルとして事前準備のための交流、当日の交流、事後の交流の三つのステージを設け、国内では日本語、海外とは英語で主に交流し、各ステージを通して情報教育、国際理解教育、英語教育などを狙いとして行っている。

### 二 国際交流とインターネット機能

国際交流で使うインターネット機能としては、メール、メーリングリスト、掲示板、テレビ会議、ウェブページなどがある。メーリングリストは、日本語で行う国内用、英語で行う海外との交信用、海外と日本の教師用、生徒用など目的に合わせて作成し利用していく。ウェブページは、参加国が連動して立ち上げ相互にリンクを張れば、カンボジア、インドネシアなどこの国にいても情報を共有するのに役立つ。テレビ会議は、回線スピードがある程度確保できると、有効な手段となる。その際に、リアルタイムのツールとして無料の音声+テキスト

チャットのソフトウェアを使うことがある。このようなインターネット機能を適宜目的に合わせて使うことによって、情報交換だけでなく、互いに連携しながら同じ目標に向かって取り組んでいるという自覚を持たせることが出来る。

たとえば、日本の生徒がカンボジアの生徒と一緒にブレゼンテーションを作るために、カンボジアに写真を数枚送ったときのことである。日本では10秒で送れるデータ量だったが、カンボジアでは、インターネットカフェでダウンロードするので30分もかかった。それが実際に交流する相手国の状況だと分かると、次回から相手のことを考えてファイルサイズを軽くしたり、CDで送ったりするなどの配慮ができるようになる。

また、交流中にインドネシアの地震のような不測の事態が起けると、即座に、相手の様子を尋ねるメールを送ることができ、交流の準備とは別に、心の交流が可能となる。

さらに、フィリピンから生徒を迎えるにあたっては、ウェブサイトを活用し、事前にもらった生徒の写真やファイルをどのように利用しようとしているのか日本側の会合の様子を掲載する。そうすると、生徒を送り出すフィリピンの校長先生も進捗状況がわかり安心する。滞在する宿舎や会場の様子も事前にウェブサイトで確認でき

るようにしておけば、日本に来る前から当日の様子をイメージしやすい。

国際交流を継続していくには、交流相手が常に意識に浮かぶようにつながっていることを示す工夫や仕掛けがいる。それを保障するのがICTである。国際交流は正規の教科ではない。それでも交流に参加し、交流を発展させていくには、担当教師の哲学、マネジメント力、学外教師との連携力が問われることになる。テーマの設定ひとつでも必ず先生が10から20のテーマを出し、ネットワーク上で議論する。あまりにも一般的なものや自分たちとは関連がないものは避け、調査が可能で、興味が尽きないテーマにするとよい。

一般的に、国際交流が進むと、高校生は混沌とした状態から整理された状態になる。ここの段階までは、レポートや反省文を書かせることで容易に導くことができる。そして、この段階までうまくいくと、自分を振り返ると同時に、次のステップを考え、非常に明確な方向を打ち出すようになる。それを影戸氏は「生活改善力」と呼んでいる。参加した高校生がこの力をつけ自分を見なおしたり参加しなかった他の仲間にも伝える気持ちになることが重要である。教師には、半年以上かけて準備し、実践し、次のWYMにつなげるというデザイン力やマネジメント力が必要になる。

## (二) 宮田義郎氏の報告

### 「出会い、継続、創造——メタ認知的にみた異文化の学びのプロセス」

#### 一 国際異文化体験から学校文化へ

WYMに参加した何人かの高校生は、自分たちが学んだだけにとどまらず、自分の高校にはたきかけるようになった。二〇〇一年七月のWYMに参加した高校生の何人かは、十一月の高校の文化祭で、自分たちが体験したことを高校の他の仲間にも経験してもらうことにした。そこで、WYM以来関わってきた大学生を招待するという企画をたて、自分たちですべて運営し、実施した。WYMに参加することで得た新しい価値観をいかし、このように自分のコミュニティに働きかけていくまで四カ月にわたる継続的な関わりが必要だった。それを端的にあらわしているのが、掲示板である。掲示板では、九〇〇〇回の発言があり、それをA4判で印刷すると四〇〇ページにのぼる量のものとなった。七月から一月までオンラインとオフラインでコミュニケーションを継続しており、それを分析すると、オンラインでの発言が質的に変容している。たとえば、七月ごろは、「私はこうです、あなたはこうですね。」というように自分のことを話すか、相手のことについて述べるか、どちら

かの「個別表現」が中心だった。それが一月になると、自分と相手に関係づけるような発言、つまり「関わり表現」が多くなっていた。また、七月には自分が話している相手のことだけを意識した発言がほとんどだったのが、一月にかけて、直接話していない人やその場にいらない人のコミュニケーションの促進も考慮した発言、「サポート発言」の割合が多くなってきた。すなわち、

一 インパクトのある異文化体験で心がゆさぶられる。

二 活動を継続するなかで、それまで傍観者であったことが、他人事ではなくなっていく。

三 最初は自分にとっての価値だったものが、自分の周りの人たちにとっての価値と捉え、その人たちにもはたらきかけていく。

という段階を経て、個人の学びをコミュニティの学びにつなげていったのである。自らの文化を背負って異文化を体験した者は、今度は自分の中に生まれた小さな異文化を背負って自らの文化を変えていくという連鎖反応が起きている。

#### 二 学び観の変容モデル

Miyata & Ueda (2006) はさまざまな異文化間の学びの場を企画、運営してきた。これらの場において、個人

表 1. 異文化の学びにおける個人観、関わり観の変容

段階	特徴	個人観	能力観 (Dweck)	関わり観	コミュニケーション
出会い以前		切り離された個人	固定的 fixed mindset	関わりなし	1対1
(1) 出会い (多文化)	多様性に 気づく				
		状況に埋め込まれた個人	成長的 growth mindset	固定的関わり	サポート発言も
(2) 継続 (異文化)	差異を意識し、理解しようとする				
		状況を創出する個人	関わりが能力を引出す emergent	関わりを自ら作り出す	メタサポート
(3) 創造 (超文化)	新しい意味を生み出す				

の学びがコミュニティの学びにつながるっていくプロセスを分析した結果をまとめたのが、表1である。

(一)「出会い、多文化」は、複数の個人またはグループが接触する初期の段階、(二)「継続、異文化」は、具体的な課題を共有して活動し、互いを理解し合おうとする段階、(三)「創造、超文化」は、今までの文化、価値観を超えた意味、アイデア、行動などが生み出される段階である。

Dweck (2006)

の詳細な研究によると、個人の能力は変わらないとみる固定

的能力観 (fixed mindset) を持っていると、他人の評価を意識し失敗を恐れる傾向がある。逆に、能力は向上するとみる成長的能力観 (growth mindset) を持っていると、自分は何を学べるかを意識して積極的に挑戦する傾向があるという。異文化の体験の場合においても、固定的能力観から成長的能力観への変化がみられる場合が多い。さらに、他人との関わりもあり方も、与えられた固定的関わりにとどまらず、自ら他者に働きかけて関わりを作り出していくという方向に変化してくる。前述の WYM の高校生の場合も、与えられた場での体験がきっかけで、個人の学びがコミュニティの学びとして発展していった事例である。WYMでも関西大学での異文化交流活動においても、学びのコミュニティの形成によって、学びの場が持続し発展していく構造が生み出されている。

ICTは、その意味で自分を見る鏡の役を担っている。ICTを活用して交流し、自分を振り返ることで、どういう方向に向かおうとしているのかが見えてくる。最初は交流の範囲が限定的であるが、次第に全体が見え広い範囲の人間関係がわかり、その人たちとつながることで自分は何ができるのか、自分はどう動いたらよいのかといったことを考えるようになっていく。つまり、学習コミュニティが次第に形成され、正統的周辺参加 (レイヴ & ウェンガー、一九九三) だったものが、徐々に中心

に向かつて参加し、活躍していつているといえよう。

このような学びのためには、インターネットを通じたオンラインツールも、日常と切り離された特別な道具としてではなく、連続的に日常につながっていくことが重要になる。最近の学生は、携帯電話でメールを交換し、いつパソコンに向かえばチャットができるかなどを調整している。携帯電話を使うことで、さらに国際交流を日常生活に近づけ、つなげることが可能になってきた。

### (三) 久保田賢一氏の報告

「バーチャルと実体験を組み合わせたフィールドワーク——大學生の場合」

#### 一 スタディツアーからプロジェクトへ

一九九四年から、関西大学総合情報学部で担当するゼミ生一四、五名を対象に夏期休暇期間中に海外へのスタディツアーを実施している。これまで、インド、フィリピン、タイ、マレーシア、オーストラリアに行き、現地の学校やNGO（非政府組織）、青年海外協力隊の職場、JICA（国際協力機構）プロジェクトなどを訪問してきた。最初の頃は、教員が中心になりツアーのスケジュールを立てて、行き先のアレンジもすべてしていた。学生にとって現地での体験は有意義だったが、ツアーに参加するお客様感覚はぬぐえなかった。しかし、インタ

ーネットが発達し、一九九八年からパソコンが手軽になり、ホームページが充実してくると、学生自身で情報を検索し、現地と連絡をとり、スケジュールを立てることができるようになった。また、帰国後は、現地で撮影した映像を編集したり写真や資料を整理して、スタディツアーの報告会と称して学内、文化祭、学外（高校、公民館）などで発表をした。さらに、活動の報告書として印刷物やウェブページにもまとめた。ICTは、情報検索やコミュニケーションツールとしてだけでなく、発表用のツールであり、自分を振り返るツールにもなっていた。学生自身ですべてを準備すると責任感もわき、コメントメントしただけ最後まで一生懸命になった。

二〇〇〇年からは、学生が成長し、大学院もできたことから、スタディツアーに加えて、海外を舞台にした研究協力として開発教育に関するプロジェクトを運営する形に変わってきた。まずはじめに、大学院生を中心にMeet the Globe(MTG)プロジェクトを立ち上げ、発展途上国に派遣されている青年海外協力隊員と日本の初等、中等教育とを結ぶ交流を支援してきた。このプロジェクトには、隊員との交流だけでなく、途上国の学校と日本の学校との国際交流もあり、これまでブルキナファソ、ボリビア、サモアとの学校間交流を支援してきた。さらに、二〇〇五年からは、学生が途上国へ出向き、



途上国の組織やNGOと連携して、国際協力プロジェクトを実施するようになった。たとえば次の三つのプロジェクトがある。

①「学習者中心の教育」推進プロジェクト（シリア）  
国連機関・パレスチナ難民支援事業（UNRWA）と連携をし、「教師主導型の教育」から「学習者中心の教育」へ指導の重点を移すために、現職教員向けのワークショップを実施している。UNRWAはパレスチナ難民向けの初等、中等学校を管轄しており、ICTを取り入れ教材開発を行い、生徒が生き生きと学習するための方法に関するワークショップを実施している。この活動には、大学院生三名、学部生二名が参加している。

②ICTコミュニティ開発プロジェクト（フィリピン・東ミンダナオ州）

現地NGO「ハウス・オブ・ジョイ」と連携し、数本しか電話のない村において村落内無線LANを敷設し、インターネット接続を行うインフラ整備とパソコン研修を実施している。この活動には、学部生五名が参加している。

③コミュニティ教育プロジェクト（フィリピン・ブラカン州）

フィリピンでは、多くの青年は高校を卒業しても職が見つからない。そこで、現地NGO（Life Improvement

Network for Grassroots Assistance and Progress: LINGAP）と連携し、そうした青年を対象に、「コンピュータスキルをつける研修を計画している。町のインターネットカフェを貸し切り、基礎的なコンピュータスキルを身につけ、職を見つけることができる力をつけさせることをめざしている。この活動には、学部生を主体に十五名ほどが参加している。

このように活動の流れを振り返ると、スタディツアーに参加する形から次第に学生を主体としたプロジェクトへの取り組みにその重点が移ってきたといえる。三年次にスタディツアーに参加し、そのなかでさらに興味や関心のある学生が次年度のリーダーとしてスタディツアーのアドバイスをする。さらに大学院生が中心となり、国際協力のプロジェクトを推進し、学部生が適宜参加するようになってきた。学部三年生から大学院までの一連のカリキュラムが充実してきたといえる。

## 二 構成主義とICTの活用

これらの活動の基礎となっているのが、「構成主義の学習理論」である。「知識は学習者自身が構成する」という前提に立ち、学習者の主体性、学習コミュニティとの関わりを重視した学習理論は、異文化間教育との整合性が高いといえる。学生が自ら関わることで知識を作り

上げていくためには、学生自身が主体的に計画の策定から、現地での対応、帰国後のまとめに関わっていく必要がある。ICTは、これらの活動を支援するツールとして効果的に活用することができる。

これまでの異文化間教育の実践として、日本にいる外国人から話を聞いたり、交流をしたり、本やビデオから情報を得たりする活動がある。このような活動は、誰でもが活用できる手法であり、確かに重要である。しかし、教室の枠のただで完結する学びは、「お勉強」である。「ほんものの学び」をするには、ひとり一人の学生が、ほんものの相手と対峙し、コミュニケーションをとりながら課題を解決する場面が必要である。それは、ICTが教室での学びと実際に海外に出かけての学び、さらに一年を通して、これらの学びを総合するためのツールとして不可欠となる。海外に出かける前に、日本からインターネットを使い、実際に対面する相手とコミュニケーションをとり、活動の調整をする。帰国後も、ホームページの作成や報告会の準備のために、ICTを活用する。それは、単なるイベントとしての異文化間教育ではなく、学生にとっては、学習コミュニティのなかでの生活そのものになる。学習コミュニティに周辺から参加し、ICTの技術やコミュニケーション能力を身につけ、次第に中心的役割を担うプロセスが、学生にと

つての生活であり、学びとなる。

#### 松田陽子氏による論点整理

三人のシンポジストの報告を受け、「異」「文化」「理解」の視点からコメントする。

報告のとおり、ICTを使えば、いつでもどこでも誰とでもつながることが可能になった。時間と空間を越えて、海外の人とも手軽につながる。時差や料金も考慮しなくてよい。身障者と健常者、デジタル的な文化志向の人とアナログ的な文化志向の人など互いに異なる人々が容易にコミュニケーションできるようになった。さらに、ICTは、自分自身を振り返るツールにもなる。たとえば、自分のなかにマジョリティとは違う文化を持っている場合、その異文化性に気づくことができる。人前では発言できなくても、ICTを使うことで表現できるようになる。ICTは、世界中の人々そして自分自身に宿るマジョリティとは異なる自己など「異」なる人々をつなぐツールになっているといえる。

それでは、ICTは人々がそれぞれに持っている文化背景とどのようにかわるのであるのか。報告にあったように、ICTを利用すれば、一人一回きりの質問ではなく、何回も相手に質問するなど相互にやり取りすることができるようになる。そうすることによって、同じことばを使っ

てもコンテキストや場によって意味が違ふことが分かり、それが文化の違いであることが次第にわかってくる。交流する相手がいて、その相手に理解してもらうように努力する過程で、コミュニケーションが密になり、それを経ることで価値観の違いなどに気づき、「文化」を意識するようになる。

「理解」とは、第一に、知識のレヴェルでわかることである。それは重要なことのひとつだが、知識以外にもある。ウォルシュは「尊重の域を一步踏み越えても」と積極的に多文化の人が何をどのように考え、感じ、実践するのか、より深く知りたいという欲望を持つことを意味する」と述べている。つまり、もっと知りたいという気持ちやわかりたいという気持ちが出てくると、知識だけでなくさらに上のレヴェルで知りたいと思うようになる。そのようなパッションを持つこと、そして、共鳴しあうことが重要である。ICTは、人々をかかわらせる力がある。一人ではなく、同じような考えの人々とながついていける。そうすることで「理解」というものの質が変わっていくだろう。

ただし、ICTには、負の面もある。実体験やアナログ的なコミュニケーションをとらずに、ICTだけでつながっているのではすばらしいことは起こらない。ICTは、あくまで補助的なものである。掲示板、チャット、

メール、ウェブで交流しお互いに学びあっていくコミュニケーションが形成されれば、確かに、動機づけしやすくなる。しかし、それは諸刃の剣で、ちょっとした発言で傷ついたり、感情的になったりもする。そこで、情報リテラシーの力も同時につけていくことを忘れてはならない。

#### まとめ

以上、三人のシンボジストとディスカッサントから国際交流におけるICTの利用方法、つながることにより形成される学びのコミュニケーションの意義、そして構成主義の学習理論に基づく説明があった。これらに加え、後半では、ICT活用の別の事例として、松原ルマさんのビデオ作品「レモン」を視聴し、ご本人からの説明を受け、ディスカッサントがコメントした。

松原ルマさんは、生後二カ月のときに日本に渡ってきた日系ブラジル人三世である。三人姉妹の末っ子で、上の二人がブラジル人と考えているのに対し、彼女は、ポルトガル語にも不自由し、家族のなかで浮いたように感じていた。そこで、自分が何人であるかを追究する「レモン」の作品が生まれた。自分が何人かにこだわり続け、中学二年から三年の一年半をかけ作品を完成させた。自分をレモンにたとえて切っても搾ってもレモンはレモンだという。完成後、上映会を何回も行い、さまざまな参

加者から感想を聞くうちに、松原さんは、自分がこだわっていた理由がわかったという。家族と自分は、ブラジル人と日本人という違いではなく、自分は家族の一員として一緒だという確信が持たなかったからこそこだわっていたのだという。この「レモン」は、東京ビデオフェスティバルで優秀賞を獲得、さらにウェブ投票で決まるピープルズ賞も受賞した。作品作りに関してデイスカッサントの松田氏は、デジタルカメラで撮影し、パソコンで手軽に編集する若者たちにとって、ICTは、かつての本や鉛筆と同様に、「考えるツール」になっていると指摘した。ビデオが単なる記録ツールではなく、表現のツールにもなっている。さらに、ウェブ上で投票するという形式は、審査員以外の人々を参加させることになり、人間関係が希薄になっているといわれる時代を補うものになっていると述べた。

さらに、砂田氏には、ろう文化におけるICT利用についてコメントをお願いした。最近では、テレビ電話が普及し、福祉機器としてビデオチャットが利用できるようになった。その意味では、遠隔でもコミュニケーションが容易にできるようになったといえよう。しかし、たとえテレビ電話で手話を使ってコミュニケーションを図っても、誤解されるという。話し手の顔や表情も文法の一部なのに、怒った顔を見ると、砂田氏が怒っていると、

勘違いされることがあるという。健聴者は、手話の手助けを見ている傾向があるからだ。つまり、これはたとえテレビ電話を利用しても、手話を理解するには、日常から顔の表情もみて理解するという意識や訓練がなければ、見えるものも見えないことを意味している。意思疎通は、テレビ画面という技術で解決するのではなく、意識でいかようにでもなると思われた。

シンポジウムを通してITからICTと表現を変える意味が、明らかになった。技術の進歩に伴い、ICTの利用が手軽になり、鉛筆のようなツール感覚になってきている。そうすると、私たちは、ICTというツールで何をするかを考えるようになり、意識がコミュニケーションをとる相手に向かう。その相手は、時間と空間を越えてどこにいても、誰でもよい。唯一、WYMやプロジエクトのようにある目的を共有するという点でつながっているコミュニケーションである。そこでのやり取りでは、日常のコミュニケーション同様に齟齬も起きる。写真など重いファイル転送などによるICT関連による認識不足からうまれるコミュニケーション上の齟齬や、価値観や時間概念の違いからくる齟齬もあるかもしれない。そのような齟齬の傾向から浮かび上がってくるものが、形成されたコミュニケーションの「文化」として蓄積されていくことになる。その「文化」を理解するには、常に、ICT

でつながっている相手、つまり、対峙している相手を意識し、相手の立場にたつてわがらうとする気持ち、パッション（情熱）が必要である。

しかし、一方的なパッションは、紙一重で相手を傷つける行為にもなる。そこで、メディアリテラシーの重要性が指摘された。また、カリキュラム上の国際交流の位置づけや評価方法なども指摘されたが、時間の関係で深めることはできなかった。

#### 〈参考文献・引用文献〉

影戸 誠、二〇〇〇、『翼を持ったインターネット』、日本文教出版。

久保田賢一、二〇〇五、『ライフワークとしての国際ボランティア』、明石書店。

久保田賢一、水越敏行編著、二〇〇二、『デジタル時代の学びの創出』、日本文教出版。

久保田賢一、二〇〇〇、『構成主義パラダイムと学習環境デザイン』、関西大学出版会。

ジーン・レイヴ、エティエンヌ・ウェンガー著、佐伯胖訳、福島真人解説、一九九三、『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』、産業図書。

Dweck, Carol (2006) *Mindset*, Random House

Miyata, Yoshiro & Ueda, Nobuyuki (2006) *Playshop*

*as Space for Emergent Learning*, International  
Conference on Learning Sciences

#### URL

Kageto Makoto (1997)

アジア学生インターネット交流プロジェクト

[http://www.isoc.org/inet97/proceedings/D2/D2\\_1.](http://www.isoc.org/inet97/proceedings/D2/D2_1.)

HTM#s27

World Youth Meeting (WYM)

<http://www.japannet.gr.jp/w2006/>

第29回 東京ビデオフェスティバル二〇〇七「レモン」

<http://www.jvc-victor.co.jp/rvf/29th/event/>

[detail\\_night20061027.html](http://detail_night20061027.html)

（くぼた まゆみ、関西大学総合情報学部教授、異文化コミュニケーション・非言語コミュニケーション）